

楡の会発達研究センター報告 10 (06年3月)

育てにくいと写る子どもの理解と対応
～子どもは天からの授かりもの、実子も里子も～

札幌市児童福祉総合センター (児童相談所)

石川 丹

現・楡の会こどもクリニック

注記：以下は、著者が札幌市児童福祉総合センター所長を勤めていた時に執筆し、臨床小児医学第53巻2005年第3・4号43～48頁に掲載された論文、を元に加筆した文章である。

I. はじめに

近年、子どもを語る場合、子育て不安、子育て困難、子育て支援という言葉抜きにしては語れない。小児神経精神科医として子どもに関する様々な相談を受ける時、親御さんたちは「どうしたら良いか教えて欲しい」と深刻に訴える。

親の訴えは「言葉がはっきりしないので何考えているか分からない」「聞き分けなくて困る」「落ち着き無くて目を離せない」「我を張る」「マイペース」「他の子と遊ばない」「思い通りに成らないと手が出る」などが目立つ。

こうしたことを心配する親は育てにくいと思って困っているからこそ相談に来るのだが、筆者は、子どもと親との分り合いがうまく行っていないからこそ困ったことになっている、と考えている。この点について考察し、問題解決を志向した提言を以下に述べる。

II. 究極の子育て困難としての児童虐待¹⁾

1) 虐待事例の実態

平成9、10年に札幌児童相談所が関わった虐待事例のうち、調査できた123例の特徴は以下の通りであった。

虐待者は実母が7割弱を占め、ついで実父、非血縁父母の順であった。当該児童出産時の実母の平均年齢は24歳であった。日本の女性の平均初婚年齢は26歳であるので、相当な若年出産と言えよう。実母の学歴は9割が中学校ないしは高校まで、実母の半数には離婚歴があった。

3割が生活保護世帯であった。乳幼児の場合は半数が母子家庭で、学童の場合は母子家庭と再婚家庭が3割ずつであった。

虐待者の半数には精神疾患、精神遅滞、人格障害などの精神的問題および非行歴や借金など社会的問題を有していた。

虐待者が言う虐待理由は、幼児では「聞き分けない」、学童では「嘘をつく」、が最多で、親からすれば問題行動をする子と映っていたと思われる。躰のつもりが虐待に陥ってしまっていたという構図が想像されよう。123例中の2割の子がIQ・DQ 79以下であった。

虐待から解放された後、虐待者が訴えた問題行動は幼児では全例で、学童の場合は9割で消失した。IQ・DQ 79以下の子のうちの4割の子は指数が9以上改善し、虐待のために滞っていた発達の挽回が見られた。

2) 虐待発生の要因

高くはない学歴をもって成人した母親は若くして子どもを儲けるが、早いうちに離婚して母子家庭になり経済的にも恵まれない状態となる。子どもが幼児になって親の指示にスムーズ従わなくなると子どもの自己主張に充分な対応が出来ないためか、聞き分け無い子と写るようになり、力に頼る躰が高じて虐待に陥ってしまうということが示唆された。

虐待事象消失後に虐待者が訴えた子どもの問題行動のほとんどが消失したということは、児童虐待の発生要因はひたすら親側にあると言っても過言ではない。

3) 「聞き分け無い」は自己主張が強いということ

虐待に陥ってしまう要因には親からすれば子が聞き分けないと写ることにある点を、子どもの立場を尊重した言い方をすれば自己主張が強く親と妥協することが困難である子、とすることができる。換言すれば、親子馬が合わない、というふうにも言える。

III. 虐待される子どもの心

筆者は児童相談所の医師として身体損傷のある子ども達の診察をし、出血斑や傷がどういふ外力で何時頃生じたものなのかを診断し、ケースワーカーがするケースワークの手助けをしていたが、多くの被虐待児を診察しているうちに次のようなことに気付いた。

傷を指差しながら「ここ、どうしたの？」と児に問うと、2～3歳であれば誰々に叩かれた、誰々がお湯を掛けたなどと加害者を教えてくれる。しかし、年長幼児や小学校低学年の子は、言葉を濁したり転んだ、とか言って、はっきりしたことを言わなくなることが多い。これは年長になると自分の置かれた立場を理解できるようになるため、親（虐待者）を守ろうとする姿勢の現われであると思われる。

こうした児の態度は叩かれても蹴られても親は親で、親を慕う心をかいま見せているのだと思うと、そのけなげさには目頭を熱くさせられる。自らに危害を及ぼす人を守ろうとする心は、すでに深い外傷を受けてしまっていると考えざるを得ない。

児童養護施設美深育成園の小川恭子氏によれば、入所してきた被虐待児童は当初無理難題を職員に要求したり、いわゆる問題行動を起こして職員が味方であるかを試し、職員がこれによく対応すると次に依存を現わす。児と職員の信頼関係が成立した後でも職員が親を非難するようなことを言ってしまうと、児に形成された職員への良好な心情は失われてしまうことがあるという。

殴られても叩かれても親を慕う子どもの心情は、けなげ、としか言いようがない。

IV. 虐待予防を目指した子育て子育て支援

虐待発生には親側の問題が多かったということは、虐待予防を目指すには親に対するより緻密な教育的配慮が必要ということになる。虐待は究極の子育て困難ということが出来るので、子育て困難を感じている親に対して適切な子育て方法を伝授する事によって、子育て困難が軽度のうちにその解消を図ることが大切となる。痒いところに手が届くような、適切な、オーダーメイドの親支援を考案することが極めて重要である。以下に私見を述べる。

1) 反抗期から『自我伸長期』へ

母親が「うちの子は『聞き分けない』」と思い始めた時期、いわゆる反抗期が虐待予防の最初のキーポイントである。

赤ちゃん時代「可愛い、可愛い」と思いつつ子育てしていた母親は、2歳頃から子どもがこまっちゃくれたことを言い、親のやり方や指示に今までとは違って素直に従わなくなると、それをうとましく思うことがある。これが親の立場に立った言い方の反抗期である。

子どもの立場に立った言い方をすれば反抗ではない。親の意向に意見を述べる子どもの行為は子どもの知恵を伸ばす大変好ましいことであるのだが、それまではせいぜいぐずる程度で結局は従っていた子どもが、親からすれば色々と意外な意見を言うようになると、反抗する悪い子と写るようになる。

この時、子どもに対して諄々に教え諭すスキルが充分でない親であれば、言わばキレて、躰と称して子に暴力を振るうようになるであろうことは容易に推測される。体罰、力の躰が児童虐待発生の源泉である、と言えよう。

日本の子育て文化から反抗期という言葉無くして、代わりに自我伸長期という言葉の定着を図ることが、虐待予防を実現するための道であると言っても過言ではない。

2) 『自我伸長期』における対処の仕方、交渉、“なだめすかしのテクニック”

二人の人が居てお互いに意見が合わなかったとしたら、二人は交渉に入るのが人の世の常である。親子間でもそうあるのが自然であり、交渉こそが虐待予防につながることになるのである。

躰とは広辞苑によれば「礼儀作法を身につけさせること」とあるが、多くの人は生活習慣や社会的ルールを教えることも躰の内と考えている。礼儀作法、生活習慣、社会的ルールは親子の間でも同じであらねばならないが、意見は親子の間で違ってても良い。

親子の間で意見が違ったら、親がする交渉は子に対して、なだめたり、すかしたり、おだてたりすることであるが、その中で“なだめすかしのテクニック”が大切である。

赤ちゃんに離乳食を食べさせている時、子が嫌がっても「ベチャベチャが嫌なんだ、おいしくないねえ」とでも言いながら口の中に入れ、子がゴックンしたら「あー、おいしかったねえ」とでも言いながら、結局は全量食べさせてしまったりすることはよくある。これが“なだめすかしのテクニック”である。言わば、嘘も方便、である。

幼児期の“なだめすかしのテクニック”はもっと難しい。反抗と写る子どもの自己主張を説得し交渉し折り合いを付けるにあたっては、幼児は赤ちゃんと違ってそれなりに理屈

を言うので、親は子どもの言い分に耳を傾けながら、相当なエネルギーと根気を持って子どもを説得し、平和裏に意見の違いを克服すること、つまり交渉成立に持って行くことはなかなか難しいからである。

3) 『二つ先のアナウンス』、見通しを良くする

幼児に広い意味での躰をする場合、子どもが取るべき行動予定の一つのみならず二つ先も逐次的に伝え、つまり『二つ先のアナウンス』を徹底すると、より効果的になる。子どもが言うことを聞かないと思いつんでしまっている親の場合は一層有効である。

例えば、歯磨きしている時に「歯磨き済んだら、トイレでおしっこして、洗面所で手を洗ってね。」とアナウンスし、トイレに入っている間に「トイレから出たら、手を洗って、タオルで拭いてね。」と声掛けし、手を洗っている時に「手を洗い終わったら、タオルで拭いて、それから外に行くよ。」と言い、タオルで拭いている時に「タオルで拭いたら、玄関に行って靴を履くよ。」というふうに声掛けする。

こうした『二つ先のアナウンス』は児からすると母親が予定している行動が二つ先まで見通すことが出来ることになる。次の次の行動予定に対する準備時間が充分持てることになり、児にとっては突然の行動予定変更が少なくなる。次の次の行動予定をも頭の中で吟味出来ることになり、思考能力も進み、自己コントロールにつながる。突然の行動変化が無くなれば、児はむかつくこともなく、平穏な気持ちが増える。母親も児が反抗しないと写るので、母子間は平和的になる。

人間誰でも『予想通りであればニンマリ満足、予想違いはガッカリ落胆』だから、ガッカリばかりよりニンマリが多い方がずっと精神衛生に良い。ニンマリ、つまり〈良いこと〉を先に作ることになるのが『二つ先のアナウンス』である。

V. 育てにくいと言われる子

1) difficult infant (難しい子)²⁾、ambivalent type (両価型)³⁾、persistent infant crying (泣きの続く子)⁴⁾

親にとって育てにくいと写る子はどこの国でも乳児の1~2割は居ることを発達心理学は明らかにしている。

Thomas²⁾らは生理的リズムが不規則で反応を強く示し、初めての事態に消極的でしり込みをし、環境の変化に慣れにくく、機嫌が悪いことが多い子を difficult infant (難しい子)と称し、乳児期の子どもの1割がそうした子であると述べた。

Ainsworth³⁾は1歳0ヵ月児と母親が二人で居る部屋に見知らぬ女性が入室し、その後児を残して母親が退室、1~3分後に母親が戻った時の子どもの行動を観察したところ、分離時に強い不安を示し、再会時は母にしがみついた上叩いたりして怒る子どもを認め、こうした子を ambivalent type (両価型) と称した。こうした子はアメリカでも、ケニヤでも、日本でも2割前後は居ることが明らかになっている。因みに、分離時に多少の不安を示し再会時に母親にすがりつく、正常安定型は6~7割とのことである。

欧米では週に3日3時間以上泣く乳児を persistent infant crying (泣きの続く子)⁴⁾と称する。こうした乳児は1割強は居るとされていて、そうした子の半数はミルクを飲むのに時間が掛かる、睡眠中に目覚め易い、など育てにくい面が多いという。

VI. 育てにくいと写る子は『要求水準の高い子』

難しい子、両価型、泣きの続く子と称されるような特徴ある子が、どこの国でも乳幼児の1～2割に居るとすれば、母親にとっては育てにくい子と写る場合が結構多くあると言えましょう。

ぐずったら中々なだまらない、寝つきが悪く夜泣きが多い、食が細い、偏食、人見知りが激しい、新奇場面に慣れにくい、などの激しい子は親にとっては手が掛かり、親が自分自身のために使う時間が少なくなる。そうすると親は子どもと付き合い切るのが大変と感じ、ストレスフルになる。

子どもからすれば、上手く適応できずに困っているという表現なのだが、自分の心境を言葉で正確に言えない乳幼児としては、ぐずりという表現に頼らざるを得ない中、親が付き合い切ってくれないとすれば、切ないことこの上無いことになる。

このような子は親の対応に満足出来ないからぐずるわけだから、「もっとこうして」「もっとああして」というふうに要求が豊富な子、と解釈することが出来る。

子どもは「もっと愛して」と言っている、親は「もう、勘弁して」と言いたい、というような状態は親子両すくみ状態と言うことが出来よう。

では、どうするか。

例1：まず、子どものぐずりへの前倒し対応を工夫することである。1回の食事に大抵は30分掛かる子がいたとしよう。このような場合は、その子の食事時間は毎回30～40分掛かるのだと覚悟し、親が希望する時間より長く食事時間を取るように日常生活を設定してしまうことである。親が15分と予定して30分掛かったらイライラするのは当然であるので、始めから30分間を食事に使えるように、他の時間を調整して割り切ってしまうと、ストレスは少なくなるはずである。

例2；祖父に会うたびに懐かないで困るというのであれば、祖父の写真を部屋に置いてしょっちゅう見せる、祖父のビデオレターを作って見せるなどをして、祖父に慣れる機会を多く作れば、祖父への親近感が高まるはずである。

例3；3ヵ月3週齢のある乳児の母親は3時間の予定で外出し、その間父親と祖父母と一緒に留守番となった。児は母親が出掛けて30分程で泣き始め、その後は父親と祖父母のなだめには全く乗らず断続的に泣き続けた。しかし、帰宅した母親が抱くとピタッと泣き止んだ。本児は2時間半母を求めて泣き続けたと解釈される。父親は母親を帰宅予定前に呼び戻し、児の要求に答え、安心を図るべきであった。

VII. 子どもの表象（思い）の親による言語化、図星を言う

乳児以外の人間は誰でも、前頭葉でまず表象（思い）し、それを言語運動中枢で言語化し、口から言葉として発し、他人に自分の表象（思い）を伝える。

子どもの場合は表象の言語化がピッタリでないことが多い。表象と言葉がピッタリでない、つまり表象通り言えてないと相手に真意は伝わり難い。

子どもが表象通りに正確に言えてないと大人に写ったら、大人は「～なのかい？」「～なんだよね」等の確認やヒントを発して、子どもが言語化を正確にし易いようにする。ヒントがあれば思考は進み易い。そうすると子どもは落ち着いて言語化に励めるようになり、親は子どもの心を読み易くなる。

親が子どもの心を読み切れなければ子育て困難感が増す。子どもの心を読み易くするには、子どもの表象の言語化を助けることを沢山した方が良い。これは決して甘やかしてはいない、知恵を伸ばす良い教育である。

親が子どもの心を読み、凶星を言えたとしたら、子どもは「こんなに分ってくれているんだ」と思って安心が広がり、親にもっと伝えたいという気持ちが高まり、言語表現が段々上手になって来るであります。

VIII. 子どもは天からの授かりもの

1) “親子馬が合わない”

上記の難しい子、両価型、泣きの続く子など三つの称され方をする子どもは、生まれつきの特徴であるとされるのが一般的ではあるが、著者は相互関係論的に捉えるべきであると主張したい。

親からすれば育てにくいと写るわけだが、子からすれば、あやし方が下手な親だ、満足を与えてくれない親だ、と思っているのかも知れない、からである。だから、筆者は子どものぐずり行動の中には、自分が一方的に悪いんじゃない、という思いが込められているのではなかろうかと考えている。そうだとすれば、子どもは親が分からず屋だと思っているのかも知れない。

育てにくいのは生得的な子どもの側の問題であるという議論がある中、相互関係論的に捉えれば、親が育てにくいと思うのはいわば親の勝手に、子どもの立場を尊重すれば、親子馬が合わない、というふうに言えることになる。

2) 子どもを〈作る〉

今日『子どもは天からの授かりもの』という言い方は滅多に聞かれなくなったが、これは受胎調整や人工授精が普及したため、〈子どもを産む〉というよりも〈子どもを作る〉という言い方が一般的になっているからと思われる。

〈産む〉と言う場合は、生まれて来るまでどんな子が生まれてくるのか分らないという思いが強くなり、最終的には五体満足でありさえすれば良いという気持ちを親は持つようになることが多くなる。しかし、〈作る〉と言う場合は、親の思い通りに子どもを作れると思ってしまう親がいてもおかしくはないことになる。そうすると、子どもが思い通りにならなけ

れば苛々したり、怒ったりすることは起こり易くなることになる。

3) 赤ちゃんは生後2ヵ月になれば自我を持つ

Murray⁵⁾ は別室に居る母親がテレビ中継を介して赤ちゃんをあやすことが出来る装置を作り母子相互交渉を観察した。赤ちゃんが見ている母親のあやし行動画像を突然生中継からビデオ画像に切り替えてしまうと、2ヵ月齢の赤ちゃんですえも母親が盛んにあやしているにも拘わらず段々不機嫌になってやがてソッポを向いてしまったという。

これは2ヵ月の赤ちゃんだって予期、期待、自我、自分の考え、表象があることを示唆している。人間誰でも予想通りであればニンマリ、予想違いはガッカリであるので、2ヵ月齢といえども赤ちゃんが親にあやされていると言うよりも、親のほうが赤ちゃんにあやされていることになる、というふうに言えるのである。

子どもを尊重する立場から言うと、子どもの自我は生後2ヵ月には生じている、と言えるのである。

IX. 里子の場合の育てにくさ

実の親子でも親は育てにくいと思っている場合が目立つ中、里親里子の関係ではどのような場合に里子を育てにくいと思うのであろうか。

1) 里親とは

生まれた家庭で育てられない場合に社会が代わって育てる仕組みを社会的養護という。社会的養護には施設養護と家庭的養護があり、乳児院や児童養護施設で養護する場合は施設養護という。実の親に代わって育てる里親の家庭で養育する場合、養子縁組した上で実の親ではない人が養育する場合は家庭的養護という。養子縁組の場合は縁組成立の前6ヵ月間を俗にお見合い期間と称している。特別養子縁組の場合は戸籍上の実子となる。

2) 里親から見て育てにくいと写った里子

i) ケース呈示にあたってはプライバシー保護に留意し、一部分を改変した。

ケース1；

臍帯が付いたままの状態の棄児。7ヵ月齢時の遠城寺式発達指数（DQ）は移動運動93、手の運動93、生活習慣79、対人関係93、発語93、言語理解93（平均90）であった。11ヵ月齢時に乳児院からA里親宅へ移った。

1歳1ヵ月、里父母になつかず悩んでいるが、工夫しているとのことであった。1歳5ヵ月、虐待しそうとの訴えになった。本児は頑固で我を通し、6ヵ月経っても変わらない。偏食がひどく、嫌いなものも少しずつ食べさせようとしたが受け付けない。諦めたらそれが基準になってしまうので、例えば細かくして分からなくして食べさせるのはしたくない。3歳の里姉（特別養子縁組）とは仲良く遊んでいる。里姉に対しても同様の方針でやってきて問題ないので、自分たちが本児の養育には適していないと思うので、特別養子縁組を前提とした委託を見直して欲しいという申し出がなされた。

1歳6ヵ月、児の様子を観察し今後の処遇を検討するために一時保護所に移った。野菜は

すぐ吐き出し、食べさせようとする奇声を上げて嫌がった。遊んでいた玩具を取られると「キーッ」と声を上げて取り返しに行く一方では、人のものを取ってしまいその子に頭を叩かれても気にしない様子も見られた。自我の育ちに相応した自己主張をはっきり出し、大人からの一方的指示には抵抗を見せていたが、見守る姿勢で対応することにより拒否的行動は減少し、指示や語り掛けも良く理解するようになった。その場の雰囲気を知り、大人への甘えの気持ちを表現できるようになった。1歳6ヵ月時DQは各々108、108、108、108、94、108（平均105）となり発達の促進が認められた。

1歳6ヵ月、B里親宅に移った。偏食はなく、ひどくぐずることも無く経過し、2歳11ヵ月、B里親と特別養子縁組が成立した。

ケース2；

母は未婚で出産した。7ヵ月齢時乳児院からC里親宅に移った。その時の遠城寺式DQは各々93、93、107、79、93、93（平均93）であった。

1歳2ヵ月齢、里母より本児は自分の顔色を見ており、近寄ると逃げることもあり、本児への愛情に自信が持てないとの訴えが生じた。里母の父が本児を溺愛していて干渉し、児が風邪を引くと里母を責めるためストレスを感じていた。里母がこの悩みを両親に打ち明けたところ、父親は激怒して里母に家を出て行くように言ったとのことであった。

1歳3ヵ月時、一時保護所に入所、遠城寺式DQは各々106、81、81、106、94、94（平均93）であった。一時保護所の生活では、愛想良く誰にでも甘えられるが、少々頑固でできない面、夜泣きを認めたが、生活習慣は年齢相当で発達に問題はなかった。

1歳5ヵ月、D里親宅に移り、問題なく過ごし3歳時にD里親と特別養子縁組が成立した。

ケース3；

母が服役中に出産した児である。1歳8ヵ月齢DQは各々127、142、112、100、100、112（平均115）であった。人見知りが強く、慣れない人や新しい場面では緊張が強く、慣れるのに時間が掛かった。

1才11ヵ月時乳児院からE里親宅に移った。2歳1ヵ月齢、気分の変化が激しく、一度駄々をこねるとひどく泣きわめき我を通す、夜泣きがあるなど養育の難しさの訴えが生じ、2歳2ヵ月齢、人や車に石を投げる、他児を叩く蹴る、しゃべらず、呼んでも反応無く、いつも部屋の隅に居る、など育てにくいので引き取って欲しいとの申し出があったが、数日後には継続することになった。2歳4ヵ月時、再び育てられないと申し入れがあったが、5日後にやはり養育するとの連絡があった後の5日後に再々度養育困難との申し出がなされた。こうした養育姿勢の変化は里父と里母の養育方針の違いのためであったという。

2歳5ヵ月時、一時保護所に移った。当初は泣いて駄々をこねることもあったが、抱っこ要求に職員がよく応じているうちに、見慣れない人にも愛想良く笑顔が出るようになり、他児とも遊べるようになった。DQは各々85、95、105、85、75、105（平均91）で発達の停滞とアンバランスが認められた。

2歳6ヵ月、F里親（長期養育里親）宅に移った。養育困難の訴えはなく、3歳3ヵ月時言

葉の遅れがあったが他には問題はし。4歳6ヵ月、構音未熟、サ行がチャ、チュ、チョになる摩擦音化があったが他に問題はなかった。

ii) 3ケースのまとめ～親子馬が合わなかった～

3ケースとも最初の里親が感じた育てにくさを、後に移った里親宅の里親は感じなかった。ケース1では里親が里姉の場合に上手く行った養育方針を変えられなかったことが、ケース2では里母とその実父の関わり方の違いが、ケース3では里親の一貫した受容的態度の不充分さが、大人からすれば育てにくいと写る問題行動を児に生じさせた。

大人から見て問題と写る行動は、児の立場に立った言い方をするならば、生き難さ表現とすべきである。これら3ケースは子どもの生き難さ表現の要因はひたすら親（大人）側にあることを示唆しており、親子馬が合わない状態、親（大人）が自己主張の強い子に付き合い切れなかった状態にあった里親里子、と考えるべきである。

X. 親子馬を合わせる、受容、「オッケー」の言葉掛け

1) 受容～大人（親）が子に合わせる～

虐待されている子が虐待者から離れると、あるいは虐待者が変わって虐待がなくなると、そして育てにくいと思いついた里親から児が離れると、虐待者ないしは里親が思っていた育て難さが消失することがあることを上述した。

被虐待児が移った先の施設、あるいは育てにくいと思われた里子が入所した一時保護所の職員の共通性は言うまでもなく“受容”である。

「取りあえずは今の君で良い」という姿勢で児と向き合って児の主張を受け、是は受け入れ、非に対しては「でもね、～したらどうだろう」という思いを込めて児と交渉し、なだめたり透かしたりして児に「～」の気になってもらうように付き合い切る、という受容の姿勢が児を安心させたために、いわゆる問題行動が消失したということが出来るのである。

この“受容”の姿勢が子育てにおいても基本とすることが大切なことになる。

親子馬が合うようにすることが大切なことになる。

2) 「オッケー」の躰

日本の子育て文化の主流は「ダメの躰」である。親にとって好ましくない行動、子のために好ましくないと思ふ行動に対して、親はまず禁止の「ダメ」を発して子が禁止に応じるとそこで初めて「よく我慢できたね」と言って褒める。

これは子どもの自己主張を抑えることがまず先行する形になっているので、子どもの人権を尊重する立場からの子育てとは言えない。

アメリカの親は「no problem」という子どもへの声掛けをしばしばする。例えば、いつもはめられているボタンはめが出来たら「no problem」と言葉掛けする。直訳すれば、問題ない、問題は解決した、であるが、親の真意は「オッケー、良く出来たね」という受容の精神が満ちた褒め言葉である。

普通に出来ていることに対するこの「オッケー」という言葉掛けは、子どもの好ましい行

動を強化し、次の機会のやる気、チャレンジ精神を育てる。子どもは認められる機会が多くなり、達成感や存在感は深まり、自信につながる。「ダメ」の先んじることのない「オッケー」は親子を友好的にすることは間違いない。

親に「褒め上手になりましょう」と提案した時、「うちの子に褒めるところはありません」と言い切るほどの拒否感を示す親に対して、「no problem」の説明をすると腑に落ちる親は多い。

XI. 一つのエピソードが子を受容する

1) 良いところ見つけ

子どもの困った行動を盛んに訴える母親から客観的事実を聞き出すには、最も困った一つだけのエピソードを語ってもらうように誘導するのが効果的である。親からすれば困ったことばかりと写る子どもの行動の中に褒められる〈良いところ〉を見つけられるからである。

ある7歳男児の

母親は、わがままで我を通す、怒られてもケロッとしている、毎日ゲームばかりで困っている、と訴えて来所した。最近の困ったエピソードは「3時からずっとゲームをしていたので、5時に『勉強しなさい』と言ったら、子どもは『8時頃やる』と答え、8時になったらワークを始めた。」とのことであった。5時にした約束を3時間後にちゃんと履行していたという〈良いところ見つけ〉ができ、親子相互の不信感を解決する糸口を作れた。

2) 親の空約束

落ち着きが無い、大声で泣くので困っている5歳男児の母が語ったエピソードは「おもちゃ付き菓子売場の前でしょっちゅう買ってくれと言いながら大声で泣きます。でも3回に1回は我慢させています。」であった。そこで筆者は「この子は何て言ってぐずるの？」と問うと、「この間、買ってくれるって約束したっしょやあ。」と言ったと母は言った。

母の空約束によって、この子は〈良いこと〉をしょっちゅう逃してきたために恨みつらが溜まって「聞き分けない、落ち着き無い」状態に成っていることが明らかになった。

親にその旨と空約束の理不尽さを説明したところ母は涙した。

XII. 思春期の子どもの問題行動への関わり方

1) 溢れ出る自分探し

子どもは10歳過ぎる頃から“自分探し”を始める。第二の『自我伸長期』である。

自分って何？と考え始めるが、論理思考能力が不十分であるため、未だ自分に納得できる説明が出来ない。内言語で、かくかくしかじか、だから～なんだ、と自分を説得できない時は誰でも、大人でも子どもでも、多かれ少なかれいらつくのは人間の常である。

自分探しに熱心な子であればあるほど、説明できない自分へのいらつきは高じる。そうしたいらつきが頭の中から溢れて出て来ると行動化され、親からすれば、社会から見れば、

問題と写る行動になる。

大人からすれば問題と写るこうした子どもの行動は、もともと、「私こんなに悩んでるのよ、分ってよ」という心の叫びの行動化であるので、派手であればある程大人には分り易いはずと、子どもは思ってしまった。

子どもの問題行動は子どもからすれば、もっと私の本当を見てよ、と言う意味を込めたアピール行動なので、それを頭ごなしに否定されれば、子どもの行動化を一層派手になることになる。

2) 「別に」「ビミョー」

ほんの数年前の中学生は大人が尋ねると「別に」という返事が多かった。今時は「ビミョー」に変化して来ている。「別に」にしても「ビミョー」にしても、この時期の子どもは自分の思い（表象）を思い通りに言葉に乗せることが出来ないのので、そう言わざるを得ないのだということを大人はよくよく理解しておく必要がある。

子どもの問題行動への大人の対処方法としてマスコミの識者は、子どもの話を良く聞いてあげて下さい、とよく言う。しかし、実際に親が子どもに「話をしよう。話を聞くから、言ってちょうだい」と言っても、なかなか話してくれないのが実情である。それは上述の通り、思春期の子どもは思い（表象）を思い通りに言語化するのが難しいからなのだが、それを理解できていない親にすれば「どうして？」という疑問にならざるを得ないことになる。

筆者はそういう経験のある親から「どうしたら良いのか？」としばしば問われる。

3) 2択3択、親が背中を見せる

5W1H、つまり、「何で?」「なぜ?」「どうして?」などと子どもに質問すると、「別に」とか「ビミョー」とかしか言いようが無い子どもは上手く返せずに窮する。

だから、子どもへの語り掛けは2択3択にすべきなのである。例えば、「お父さんが中学の時はい〜だったけど、今は…かねえ、〇〇かねえ？」などと話せば、子どもが答えに近いと思いき易い選択肢を示して上げることになるので、子どもは「〇〇に近いと思う」とか言って答え易くなり、親子の会話は進むことになる。

こういう語り掛けは親が自分の経験を述べていることになるので、親は子どもに自分の背中を見せていることになる。古来、子どもは親の背中を見て育つ、と言われて来たが、現代社会では仕事上の父親の姿を見る機会がない子の方が多い。「お父さんの仕事は？」と問うと「会社」と答えられるが、「会社で何してるの？」とさらに質問すると、「知らない」と答える子が多いことが当然の社会になっている。子どもが“親の背中”を見るのが難しい世の中になっている。

親が親自身の青春を語ることは、子どもに対してモデル（手本）を示すことになる。真似し易い手本があれば、学びは進む。子である以上親に似ているところ、親と馬が合うところは必ずあるはずだから、学び易い手本になる可能性が大きい。子どもは手本をあれやこれやと思い巡らした結果、「これならやれそう」と思うことになれば、子ども自身の自分探しも

進むことに成る。

引用文献

- 1) 石川 丹：札幌市児童相談所における虐待 123 事例の研究－発達の剥奪と挽回－. 社会福祉研究 84：97-102, 2002.
- 2) ステラ・チェス、アレクサンダー・トマス：子供の気質と心理的発達. 星和書店、東京. 1981.
- 3) Ainsworth MDS et al: Patterns of attachment : a psychological study of the strange situation. Laurence Erlbaum. 1978.
- 4) Wolke D et al: Persistent infant crying and hyperactivity problems in middle childhood. *Pediatrics* 109;1054-60, 2002.
- 5) Murray L: Emotional regulation of interactions between two-month-olds and their mothers: *Social Perception in Infancy*. Ed. by Field FH, Norwood, NJ, 1985.